

鹿大のチカラ

KAGOSHIMA UNIVERSITY

医学部

全国各地で問題になっている医療格差問題。多くの離島を抱える県内では、その是正が大きな課題だ。保健学科の八代利香教授―総合基礎看護学Ⅱらによる総合基礎看護学講座チームは、どの地域でも等しくプライマリケア（患者が最初に接する医療のこと）を受けられることを目指し、先進諸国との国際交流を試みている。

プライマリケア 八代利香 教授(46)



在価値を高めていくことが必要です」と話す。

例えば十島村の七つの有人島には、巡回医師が1人しかおらず、それぞれにある診療所には看護師が1人いるだけだ。ところが看護師のできることは法律で「診療行為の補助と療養」と定められ、プライマリケアを始めとした診療行為はできない。そのため死亡確認も島内できず、島外へ搬送することもあるという。

こうした離島やへき地の問題を考えるとき、医師不足という観点からだ、医師中心の態勢をどう構築するか、という問題設定しかできない。医師以外の

看護職役割 海外に学ぶ

医療従事者、特に看護師のあり方に目を向け、その裁量範囲を広げないと、今の医療の問題点は解決できないと八代教授は考



同講座チームは2008年3

え。第1回のテーマは「韓国と米国におけるナースプラクティシヨナーの役割」。ナースプラクティシヨナーとは、修士レベルの看護資格を持った看護師のことで、プライマリケアを担当する。通常の看護師よりも裁量範囲が広く、米国のほとんどの州において、ナースプラクティシヨナーは薬の処方ができる。日本でも養成課程を設けた大学もあるが、医師会の反対もあり、なかなか制度として進んでいないのが実態だという。

また昨年3月には、地域貢献を目的に「第1回かごしま国際看護フォーラム」を開き、「病院と地域の連携における看護職の役割」をテーマに意見を交わした。大学関係者だけでなく、地域の医療従事者も対象とし、約300人が集まる大がかりなものとなった。鹿児島大が地域貢献の一環として国際フォーラムを開催するのは初めての試みだったという。

第1回国際セミナーで、米国の教授から触診について教わる鹿児島大の教員ら。八代教授提供

セミナーでは両国の大学から教授らを招いて話を聴き、鹿児島大の教員らと質疑・討論をした。以後、年に1回セミナーを実施している。

「看護職は病気がだけでなく人間全体を見ながら患者と向き合う職種。地域と連携しながら地域住民のニーズに見合ったケアをしていくことが必要。そのためには先進諸国の実態を参考に看護職の意識を高めたい」と話す。今後は、セミナーにとどまらず、海外大学と協定を結び、積極的な学生交流を図っていききたいと考えているという。